

■ラウンドテーブル 6月21日(日)9:30~11:30

第1会場 ダンスの基本的内容を実技を通して考える

○会場：体育館2階ダンス場

○提案者：高橋和子（横浜国立大学）伊藤史織（横浜国立大学）

○設定理由

中学校ダンスが必修化し3年が経過したので、全国の中学生1万人に履修したダンスの種類と具体的な内容を調査した。その結果、「現代的なリズムのダンス」は約8割の生徒が受けており、「振付ダンス」「発表」が多く「リズムに乗り自由に踊る」と答えたのは5割弱。「創作ダンス」は約6割が受けており、その内容は「簡単な作品創作」「発表」が多く、「即興的に表現する」と答えたのは約3割。「フォークダンス」は約4割が受けており、主な内容は「外国のフォークダンス」であった。学習指導要領（解説）等で提示されている「基本的な内容」はあまり教えられていないことから、今回は「表現系・リズム系・フォークダンスの基本」をおさえた内容と指導法のコツを実技で体験したい。それを受けて、参加者に模擬授業をやって頂いたり、意見交換を行ったりしながら、ダンスの基本的内容を探っていきたい。

第2会場 「しゃがむ（和式便所座り）」ができる・できない 28年度より実施の健康診断項目の意味と動きの改善案

○会場：体育館1階柔道場

○提案者：原田奈名子（京都女子大学）

○設定理由

来年度4月より「しゃがむ」「手を挙げる」等を健康診断項目として評価することになった*1。診断結果を受けて、体育授業としてその動きの改善にどのようにコミットできるか。下記に示す5種類のワークを実際に体験いただき、それを踏まえ、体育授業の学習内容について討議する。

◆1：3種のストレッチ*2

★1：知識に働きかける：股関節や膝、足首の位置や機能に関する知を正しくする(ボディ・マッピング)

★2：アライメントを整える：操体法から一種

★3：感覚固有受容器を目覚めさせる：タッピング(指先で軽く打つ)とブラッシング 振る(末端の関節から近位へ)

*1：学校保健安全法施行規則一部改正（平成26年文部科学省令21号・4月30日公布）、健康診断項目に「運動器に関する検診」導入

*2：NHK、27年度4月23日放送、クローズアップ現代「子どもの体に異変あり～広がる“ロコモティブ・シンドローム”予備軍～」において提案された改善案

◎当日、大学生のデーターを提供し、討議の一助にします。参加者は写真や動画撮影ができるスマートフォン等を持参ください。

第3会場 ターボジャブを用いた投動作の改善

○会場：体育館1階アリーナ

○提案者：斉藤雅記（東京福祉大学）

○設定理由

こどもの運動を考えたうえで投能力、またはその中に含まれる投動作は課題として挙げられるものの1つである。単純な投距離を伸ばすことも重要な要素の1つとして考えられているが、投動作を改善していくことは、投運動という1つの枠組みの中だけのことではなく、様々な運動で発揮される投運動へ良い影響を及ぼすことが考えられる。

本ラウンドテーブルにおいては、前半ではターボジャブを使用した投動作の改善（投げ手の後方への引き上げに重点を置いた投動作改善）について報告を行い、後半では、実践を通し、授業づくりで活かす投運動のあり方について話題提供を行う。

投動作に興味がある方はもちろん、ターボジャブに触れたことが無いという人も、この機会にターボジャブに触れていただき、授業へのヒントとして活用して頂ければ幸いである。

第4会場 体づくり運動におけるアクティブ・ラーニングを促すタブレット（ICT）活用ソフトの開発提案

○会場：7号館210教室

○提案者：佐藤豊（鹿屋体育大学）

木原慎介（東京国際大学） 佐藤若（山形県立山形中央高等学校） 梶ちか子（鹿屋体育大学）

○設定理由

子どもの運動習慣の二極化への対応として、体づくり運動の指導時間数の目安が示されるなど授業の充実が求められている。しかし依然として、アプローチの困難さを訴える教師も多い。

一方、文部科学省の「教育の情報化ビジョン」では、学校におけるICT活用イメージとして、生徒の一斉、個別、協同学習の推進、教師の指導の充実、学習評価情報の効果的収集の3つの視点を挙げている。

さらに、現在、教科におけるアクティブ・ラーニングの充実が求められている。

本ラウンドでは、学校体育事例集第7集「体づくり運動」に準拠して開発した「体づくり運動アプリ」の実際の授業の様子やタブレットの操作体験を通して、これらの複合的課題への教育的可能性について参加者の方々と検討をしたい。

第5会場 ダンス経験の少ない教員にも指導可能な「現代的なリズムのダンス」の授業展開方法について

○会場：7号館211教室

○提案者：増山尚美（北翔大学）

○設定理由

ダンスが中学校で必修化され「現代的なリズムのダンス」を取り上げている学校は多い。自身のダンス経験および指導経験の少ない教員であっても、既存のステップや振付をなぞるのではなく、交流を通して生徒が相互に学び合う授業展開が可能となる方法について事例を報告する。評価の基準と方法について示唆を得たいと思う。

第6会場 体育授業における教育内容・教材の順序構造とその構成方法について（5） —学校体育における空手道における自由組手の指導方法について—

○会場：7号館308教室

○提案者：竹田唯史（北翔大学）

山田雪花（千歳市立富丘中学校）佐藤亮平（北海道大学大学院教育学院）梅田千尋（北海道小平高等養護学校）小野地柊（北翔大学大学院）近藤雄一郎（北海道大学大学院教育学研究院）進藤省次郎（元北海道大学教授）

○設定理由

体育科教育の中心的課題として、各スポーツの技術・戦術の指導が位置づけられている。この技術・戦術の指導については、これまで多くの研究や実践がなされてきている。しかし、依然として技術・戦術の内容・教材・方法の概念が曖昧で、それらを如何に構成して、すぐれた授業（わかる・できる授業）を作り上げていくかという方法論については未だ研究の余地があると考えられる。

我々は、1985年頃より、スポーツの技術・戦術学習における教育内容（認識対象）・教材（習得対象）・教授方法・評価についての教授学的研究を進めてきた。これまでのラウンドテーブルでは、我々の基本的な研究方法論について発表し、スキー、サッカー、フラッグフットボール、バレーボール、ラクロスの基本的な技法の教育内容・教材構成について紹介し、参加者の方々と議論を進めた。

今年度は、空手道の指導方法に関する実践を報告する。具体的には初心者を対象として、空手道の魅力の一つである「自由組手」を安全に、楽しみながら、確実に技術認識・習得を目指した指導方法について報告を行う。

第7会場 伝統的な動きを学ぶ剣道学習の提案 —竹刀を用いない学習プログラムの効果—

○会場：7号館201教室

○提案者：有山篤利（兵庫教育大学大学院）

村崎謙志朗（兵庫教育大学大学院）藪根敏和（京都教育大学）岡田佐知子（篠山市立今田中学校）

○設定理由

中学校において武道が必修化され、保健体育科教員の剣道に関する指導力向上が課題となっているが、その解決のためには、学習内容の検討と指導方法の改善という二つの問題に迫る必要がある。そこで、本研究では、球技領域の学習を参考にしながら、剣道の学習内容を「打突をしない時の動き」と「打突のための竹刀操作」に分けて整理することとした。そのうえで、間合いを「詰める」「外す」、剣先を「そらす」などの打突のスキルに含まれない攻防の動きを学ぶことによって、伝統的な剣道の動きに対する理解が深まると考え、「打突をしない時の動き」の教材化に注目することとした。「打突をしない時の動き」はこれまで学習内容として焦点化されることが少なく、その指導に関する検討も不足しているが、今回は、「竹刀を用いない学習」が効果的であるという仮定のもと、そのプログラム化に取り組んだ。

本ラウンドテーブルにおいては、中学校における指導の様子を報告しながら、「竹刀を用いない学習プログラム」によって「打突をしない時の動き」を学ぶことが、伝統的な動きを含んだ剣道らしい攻防の習得につながるのかどうか、その妥当性等について意見交換をしたいと考える。

第8会場 研究授業後の協議会における指導助言者の役割

○会場：7号館301教室

○提案者：木原成一郎（広島大学大学院教育学研究科）

大後戸一樹(広島大学) 岩田昌太郎(広島大学) 久保研二(島根大学) 村井潤(武庫川女子大学)

加登本仁(滋賀大学) 嘉数健悟(沖縄大学) 中西紘士（広島大学附属小） 坂田行平（広島大学附属小）

○設定理由

校内研修で行われる研究授業後の協議会として、参観者が感想を書いた付箋をまとめて発表するワークショップ型の運営が普及してきた。しかし、広く知られるようになったワークショップ型協議会であるが、その実施に関わる課題はまだ未検討の部分も多くあると考えられる。その中でも特に喫緊の課題であると考えられるのが、ワークショップ型協議会の指導者の役割の明確化である。それは、経験のある教師たちから出された意見を集約し、改善課題を自覚させ、新たな発見にまで導けるかどうかは、協議会の指導者の力量にかかっていると考えられるためである。

今回のラウンドテーブルでは、公立小学校で体育授業を研究教科とする中堅教師の実際の研究授業のビデオ映像を視聴し、参加者に授業に対する感想を書いた付箋をまとめて発表するワークショップ型の模擬協議会を体験していただく。そして、共同提案者が校外指導者（大学教員等）と校内の指導的立場（研究主任等）という2つの立場から登壇し、それぞれ指導助言を行う。最後に、その指導助言に対して参加者のみなさんに意見をいただき、教職歴に応じた振り返りを促す指導助言者のコメントのあり方について考えていきたい。

第9会場 途上国における学校体育の普及・振興に向けた支援のあり方について

○会場：7号館309教室

○提案者：中島憲子（中村学園大学）

山平芳美（国際武道大学） 海野勇三（山口大学） 門田理代子（中村学園大学）

○設定理由

Education for all や貧困撲滅が国際的な課題とされる中、カンボジアでは国際機関や各国 NGO・個人による様々な教育支援活動が展開されている。学校体育の普及・振興に関しても、日本の NGO/NPO Hearts of Gold の支援を受け、2009年に小学校で保健体育科が本格導入された。しかし、教育予算の貧困、教員養成・現職教育の未整備、教育行政の伝達機構などの問題で、授業の実施は極めて限定的なままに留まっている（山口;2012）。

そこで、海野ら（2012, 2013）は、2012年以降、山口県および福岡県に所在する4大学で教員志望の学生に呼びかけ国際教育協力ボランティア組織を立ち上げて、「地域に根差す学校運動会」の普及を通じてカンボジアにおける学校体育の振興・普及を図るべく教育開発協力活動に取り組んできた。

本ラウンドテーブルでは、カンボジアの学校体育の普及・振興に向けた支援活動の現状について論議し、その成果や課題について意見交換を行うことを目的とする。具体的な活動については、大学教育プログラムを通じたカンボジアにおけるスポーツ教育活動（山平芳美）、「地域に根差す学校運動会」プロジェクトの取組み（海野勇三）、カンボジア農村部の児童の運動能力について（門田理代子）の報告を予定している。

第10会場 体育授業における技能と学習について

－構成主義的アプローチからの授業実践を手がかりに－

○会場：7号館304教室

○提案者：松本大輔（西九州大学）

原祐一（岡山大学） 宮坂雄悟（尚美学園大学） 久保明広（佐賀大学附属小学校）

○設定理由

体育授業へのアプローチの背景となる学習観には、様々な立場がある。その一つとして近年話題になっている構成主義的学習観がある。そうしたアプローチからの授業実践に向けて、技能の捉え方に着目し、昨年度は、教科教育、心理学、社会学的なアプローチから体育授業における技能のあり方について話題提供を行い、議論を深めた。その中で、構成主義的に技能を捉える際の状況と文脈の重要性、既存の技術との関係、系統性の問題、評価の問題という観点が成果及び課題として挙げられた。これらの成果と課題については技能の問題としてのみならず授業づくりにかかわる問題、いわば構成主義的なアプローチによる授業づくりにおける学習観の問題として議論する事が重要であると考えられよう。

そこで本ラウンドテーブルでは、実際に構成主義的なアプローチによる授業実践を参考に、技能の捉え方、系統性の問題、評価の問題について議論を深めることを通して、これからの学校教育における体育の技能と学習について考えることを目的にしたい。

第11会場 体育科授業研究組織の教員及び研究成果をつなぐネットワーク構築のための実証的研究－体育科授業研究組織におけるミドルリーダーの存在に視点を当てて－

○会場：7号館202教室

○提案者：鈴木聡（東京学芸大学） 内田雄三（白鷗大学） 近藤智靖（日本体育大学） 山口拓（筑波大学）

○設定理由

教師教育において、授業研究が果たす機能は大きい。体育科における授業研究は、官制研、民間研、校内研において盛んに行われている。私たちの研究チームは、昨年度の日本体育科教育学会において、参会者とともにワールドカフェを実施し、体育科授業研究の現代的課題について検討した。今年度のラウンドテーブルでは、昨年話題になった研究組織を牽引する「ミドルリーダー」に焦点化して検討を深めたい。提案者からは「研究組織を支えるフォロアーの役割」及び「研究成果の評価・活用が機能している学校例」について報告を行う。また「動機の異なる教員集団を刺激する方法」や「ミドル層に必要な専門性や職能」について参会者とともに議論し、10年次研修や中堅教員対象の研修の意義と課題について方向性を見出し出したいと考えている。なお提案者が報告する研究内容は、平成26年度～28年度 学術研究助成金基盤研究（C）「体育科授業研究組織の教員及び研究成果をつなぐネットワーク構築のための実証的研究」の一部である。